427-705

亞細亞大觀

古邑金州

百三十二回
十二輯ノ二

金州志善堂……一
關帝廟鐵鉾……二
蟒大帥廟……三
龍王廟……四
平山佛爺廟……(一)五
平山佛爺廟……(二)六
渤海を臨む……七
閻氏の邸宅……八
乃木勝典氏戰死の家……九
金州副都統衙門址……十
金州副都統衙門小考　三宅俊成

大連市山縣通一九三
發行所　亞細亞寫眞大觀社
電話(2)六二三五番
振替大連七一八番
(毎月一回發行)

版權所有　不許複製

大連市山縣通一九三
編輯人　青山春路
同
發行人　島崎役治
同
發行所　亞細亞寫眞大觀社

金州副都統衙門小考

三宅俊成

清末渤海の防備を嚴にする爲め、道光廿三年（西紀一八四三）熊岳副都統衙門を金州に移し、康熙廿六年來（西紀一六八一）の金州城守尉を廢し協領に改めた。

斯く金州に副都統衙門を移し大いになすあらんとしたが、英佛聯合軍の旅大來冠や、日・露兩國軍に對して、適宜の處置も取るを得ず、光緒廿六年（西紀一九〇〇　明治三十三年）七月には露國の爲めに金州城も占領され、護理副都統闔禝陞は縛され浦鹽に送られた爲めに金州副都統衙門は消滅した形となつた。從つて金州に副都統衙門の置かれた期間は纔に五十七年間に過ぎなかつた。勿論名義上此の後も奉天に金州副都統衙門の辨公署があつた。

金州副都統の權限に就いて一言せば、金州副都統は奉天に駐する盛京將軍の支配下にあり、蓋州以南の遼東半島即ち金州城・水師營及び復州・蓋平・熊岳の三城の軍事及び旗人に關する事項を統督してゐた。

金州副都統直轄下の金州城の旗軍は滿洲八旗と漢軍三旗及び蒙古一旗よりなり左の如くである

旗の種類		旗長	旗所	備考
滿洲八旗	滿洲正黃旗	滿洲防禦	金州城內施家街五四番地	學堂官舍
	〃正白旗	仝	仝上三七番地	仝
	〃正紅旗	仝	閻家街二七番地	
	〃正藍旗	仝	仝	郵便局官舍
	〃鑲黃旗	仝	聖廟街一五番地	
	〃鑲白旗	仝	北街三二番地	警察官舍
	〃鑲紅旗	仝	施家街三七番地	學堂官舍
	〃鑲藍旗	仝	民倉街三〇番地	官舍
		仝	南街五三番地	會事務所
漢軍三旗	漢軍正黃旗	漢軍佐領	仝 會館廟街四〇番地	學堂官舍
	〃正白旗	仝	仝 聖廟街六五番地	圖書館
	〃鑲黃旗	仝	仝 施家街五二番地	學堂官舍
蒙古巴爾虎旗	巴爾虎佐領	仝	趙家街七三番地	民家

金州副都統管下の官員の階級は副都統以下城守尉、協領、防守尉、佐領、防禦、驍騎校、領催兵等に分れ、金州城に一〇三五名、水師營に七一六名、蓋州城に五一七名、熊岳城に七一六名、復州城に六〇九名總計二九八四名である。併し金州城には此の外洋槍步隊二百名、翼長一員、營總二員、扎闌四員の幹部及び馬隊八十名と其の幹部營總一員、扎闌二員を有して居るから、金州城の官員は一千三百二十五名となる。是れ等の人員は殆と全部戰鬪員であるが、又平時は衙門の事務を輪番に取り、非番の下級の者は多く農業に從事し、春秋二回の招集に應ずるに過ぎない。即ち兵員は操場（練兵場金州東門外公學堂及苗圃の地）で春（陰歷二月）秋（陰歷八月）の候、約十回午前四時より十一時頃まで各種の教練をし、副都統はこれを檢閲するだけである。尙兵は旗人中十六歲以上の身体强健なる男子より選んだ。次に副都統衙門の事務は印務處と左右兩司に分れて掌り、印務處は鈐印及び起案、左司は送附文書の淸書、發送、右司は文書の受附等を各々分掌する。此の副都統衙門の外に副都統の下に旗衙門があつて、滿洲協領がその長官となり旗人の徵稅及び旗倉等に關する事務を掌理してゐた。その遺址は眞武廟街の郵便局官舍の處である。

以上簡單ながら金州副都統衙門に就いて參考まで書いたのであるが、要点のみと考へたので不備の處が頗る多くなり誠に申譯がない。

尙前百三十二回十二輯ノ一を校正しなかつたので誤りがあり。金州地池小考は金州城池小考の誤りである。其の他洪武十年の下に西紀一三七七の脫落等がある。

金州志善堂

金州城内西門の近くの旗倉街に在り。門の聯に「慈善機關地」「衛生道理門」とあるが如く、此の志善堂は一種の慈善機關であると共に酒、阿片嗎啡等を好む者を矯正する處である。宗教上から云へば在理教に屬してゐる。在理教の教祖は明萬曆進士楊萊如の始むる處にして、儒釋道の三教歸一を說き煙酒を戒む。在理教の内容に就いては秘密結社的な處あり、深く知る事は出來ない。

寫眞は志善堂の内陣で、正面に釋迦觀音彌勒等を左に揚祖、右に孔子、老子を祀る。在理教の一特色として瓢箪を供へる風あり、其の理由に至つては口を喊して語らないが古來瓢箪と仙人とは關係深く、瓢箪を用ひて、其の中から青龍刀や神針或は蝗や神鷹、駒、神藥等を出した仙術は人口に膾炙する處であれば、必ずや在理教と瓢箪は相當に關係が深いものがあらう。寫眞の中央の瓢箪は四五十年も磨かれて居るとの事で立派なものである

金州副都統管下の官員の階級は副都統以下城守尉、協領、防守尉、佐領、防禦、驍騎校、領催兵等に分れ、金州城に一〇三五名、水師營に七一六名、蓋州城に五一七名、熊岳城に七一六名、復州城に六〇九名總計二九八四名である。併し金州城には此の外洋槍步隊二百名、翼長一員、營總二員、扎闌四員の幹部及び馬隊八十名と其の幹部營總一員、扎闌二員を有して居るから、金州城の官員は一千三百二十五名となる。是れ等の人員は殆と全部戰鬪員であるが、又平時は衙門の事務を輪番に取り、非番の下級の者は多く農業に從事し、春秋二回の招集に應ずるに過ぎない。即ち兵員は操場（練兵場金州東門外公學堂及苗圃の地）で春（陰歷二月）秋（陰歷八月）の候、約十回午前四時より十一時頃まで各種の教練をし、副都統はこれを檢閲するだけである。尙兵は旗人中十六歳以上の身体强健なる男子より選んだ。次に副都統衙門の事務は印務處と左右兩司に分れて掌り、印務處は鈴印及び起案、左司は送附文書の清書、發送、右司は文書の受附等を各々分掌する。此の副都統衙門の外に副都統の下に旗衙門があつて、滿洲協領がその長官となり旗人の徵稅及び旗倉等に關する事務を掌理してゐた。その遺址は眞武廟街の郵便局官舍の處である。

以上簡單ながら金州副都統衙門に就いて參考まで書いたのであるが、要点のみと考へたので不備の處が頗る多くなり誠に申譯がない。

尙前百三十二回十二輯ノ一を校正しなかつたので誤りがあり。金州地池小考は金州城池小考の誤りである。其の他洪武十年の下に西紀一三七七の脫落等がある。

旅家街五二番地　學堂官舍
蒙古巴爾虎旗　巴爾虎佐領　全　趙家街七三番地　民　家

城隍廟內奉

金州城內城隍廟の正殿前に周圍四・二米の大きな槐樹があり神木として小廟を造り祀つてゐる。蟒大帥之神位、蟒老將軍之位、黑蟒將軍之位等と書ける神牌が供へられてゐる。

金州關帝廟の大鐵鉾

金州城內の中央に關帝廟があるが、其の廟內に大鐵鉾がある。傳說によれば昔關帝の銅像と共に西海中より得たものと云ふ。大鐵鉾の長さは二・九八米で、鉾の身が約一・〇五米、柄が一・九三米で、其の重さは約八十斤ある。と云ふ話である。

尙本廟に祀る關帝の像は前記の如く銅製で西海より得て運搬して來たが現在の地で動かなくなつたので、此の地に廟を立てゝ祀るやうになつたと傳へゝ、又銅像の下に井戸があり銅像を動かすと水が井戸より湧出して金州城が水中に沒すると恐れてゐる。

城隍廟內蟒大帥廟

金州城內城隍廟の正殿前に周圍四・二米の大きな槐樹があり神木として小廟を造り祀つてゐる。蟒大帥之神位、蟒老將軍之位、黑蟒將軍之位等と書ける神牌が供へられてゐる。此の神木の中には數十尺の大蟒が棲み、これを見る者病を得ると云ふ。

尙城隍廟は金州城の鎭守の神で、誠應靈佑侯金州城隍之神位を安置してある。

金州關帝廟の大鐵鉾

金州城內の中央に關帝廟があるが、其の廟內に大鐵鉾がある。傳說によれば昔關帝の銅像と共に西海中より得たものと云ふ。大鐵鉾の長さは二・九八米で鉾の身が約一・〇五米、柄が一・九三米で、其の重さは約八十斤あると云ふ話である。

尙本廟に祀る關帝の像は前記の如く銅製で西海より得て運搬して來たが現在の地で動かなくなつたので、此の地に廟を立てゝ祀るやうになつたと傳へ、又銅像の下に井戸があり銅像を動かすと水が井戸より湧出して金州城が水中に沒すると恐れてゐる。

平山佛爺（一）（仙）

金州城北一里半、平山（三四一米）の嶺に大洞窟があり、佛爺洞と云ふ。洞内に入ること十數米の奥座あり、自然石を刻みて出來た大石佛一座慈光をたる處に、垂れてゐる。其の側に石彭と稱するもの光を垂れば妙音を發する。蓋し自然に出來た事空洞の音、叩けば得る。又右に曲り進まば尚十數米入る洞の音である。其の行きづまりたる處に近く小石佛一座前に金州城西北十里有泉滴佛前石鉢とある。又洞口光州城西北十五年小陽月建立の黃紳德攻碑等によれ

（回二輯二十　觀大亞細亞）

龍王廟

金州城の西北に向ひ行くこと十數町にして、金州灣に吃立せる丘上に一宇を見る。これ龍王廟にして、風光明媚を以て世に知らる。金州の龍王廟公・電母・風伯・雨師・魚浪神等を祀るには師廟後に塚の如きものあり、土人傳へて云ふ。雨小伯龍の母の墓と。毎年秋、霜降りて翌年頃に師なる龍は天より降り母の墓に詣でて故に常に云ふ。

龍王廟に祈雨雪を下す地方の教示を請ひ受け歸なるに順調なるは幾ばくか分似たる石塊と云ふ。

龍王廟の附近に刀蛙や魚等に昔々大昔、村公村は蛙の人人達々魚等の主が此の地方に棲傳說がある。水を出し、村人は蛙と魚人達を頗る困難を斬り殺したる傳ふ。蓋し此の魚と蛙の刀なら地方化蛙と村人達の主なつたと結果害を受けたる寓意はあの

（回二輯二十　觀大亞細亞）

平山佛爺洞

（一）（仙人）

金州城北一里半、平山（三四一米）の嶺に大洞窟があり、佛爺洞と云ふ。洞内に入ること十數米奥まりたる處に、自然石を刻みて出來た大石佛一座あり、慈光を垂れてゐる。其の側に石彭と稱するものあり、空洞の音で叩けば妙音を發する。又右に曲り進まば尚十數米入る事が出來た洞の音、其の行きづまりたる處に近く小石佛一座ある。

此の佛爺洞の文獻に見ゆるは、明の遼東志を以て最古とする。即ち同志金州衞山川地理圖に「平山洞佛洞」とあり、又全遼志卷之四故蹟志に平山佛洞一名金州城西北十里有泉滴佛亀石鉢とある。又洞口前に光緒十五年小陽月建立の黄帥德政碑等によれば、光緒十三年（明治十七年）の春、黄士林なる者金州城西十里に駐せし時、其夫人病に罹り、此の廟に祈願せしに、新に道路を改修し廟宇を建立し、佛應驗ありしために報ずと云ふ。

今此の廟に住する者は僧ではなく道士であり、仙人と呼ばれてゐる。風貌頗る仙骨を帶びて世に寫眞は洞窟内にて冥想に耽ける仙人である。

龍王廟

金州城の西北に向ひ行くこと十數町にして、金州灣に吃立せる丘上に一宇を見る。これ龍王廟にして、風光明媚を以て世に知らるる。金州の龍王廟電公・電母・風伯・雨師・魚浪神等を祀る。雨師は後に塚の如きものあり、土人傳へて云ふ。雨師小伯と小龍の墓とす。毎年秋に降る霜が降る頃翌年に天より降り母の墓に詣り、故に常に云ふ。

龍の師なる伯龍は地方の教示を受けぬと云ふ。

風雨雪を司り、雨雪は順調を請ねば幾分似たり塊あり、

王廟の祈願に附近の蛙や魚等に就いて下刀の如きや魚等の主を斬り殺しの地方に棲み荒し洪水の結果害を受けたる寓意は此の蛙の村の蛙これ又魚等の溺死せしめたり畠を荒冶たり請ふ。

人人とは人々魚をのの人達の頗る困り、公願ひ大刀を以て仇を刀なる難儀を救はんため大刀の時の魚とてあの

公化蛙は人達は人達の主を斬り殺しの時の魚とて

平山佛爺洞を望むより渤海

佛爺廟前に立ち、瞳を遠く渤海に放てば、一望濶然、海天乃ち開け、碧瀝渺々、海路遙かに小島點在し、漁舟霞を乘せて駛り、誠に風光佳絶の仙境である。

平山佛爺洞
（二）（大石佛）

佛爺洞の大石佛は洞窟の自然石を巧みに利用して、刻みあげたものである。石佛は何に佛なるか明言する事は出來ないが、獅子の背上にある蓮臺に在る處から考へれば、或は文珠菩薩ではあるまいかと推考するものである。勿論普通文珠菩薩の像の具備すべき種々の條件を總べて兼ね備へてゐるとは云はれないのである。從つて學者の御教示を得ば幸ひである。

尙又本大石佛の彫刻年代は全く不詳ではあるが既に明代を下らぬ事は遼東志の記事でも明かである。併し數年前有名な金石學者羅振玉氏が、この石佛の寫眞を見て六朝頃のものと云はれたと云ふ事を某氏より聞いてゐるが、果して然るかは研究の餘地があるまいかと思つてゐる。

若し本石佛が文珠菩薩とすれば、滿洲の文珠崇拜と關係を有し、尠くとも遼代頃まで溯り考へられはしまいかと思ふものである。

平山佛爺洞より渤海を望む

佛爺廟前に立ち、瞳を遠く渤海に放てば、一望濶然、海天乃ち開け、碧瀝渺々、海路遙かに小島點在し、漁舟霞を乘せて映り、誠に風光佳絶の仙境である。

平山佛爺洞
（二）（大石佛）

佛爺洞の大石佛は洞窟の自然石を巧みに利用して、刻みあげたものである。石佛は何に佛なるか明言する事は出來ないが、獅子の背上にある蓮臺に在る處から考へれば、或は文殊菩薩ではあるまいかと推考するものである。勿論普通文殊菩薩の像の具備すべき種々の條件を總べて兼ね備へてゐるとは云はれないのである。從つて學者の御教示を得ば幸ひである。

尙又本大石佛の彫刻年代は全く不詳ではあるが既に明代を下らぬ事は遼東志の記事でも明かである。併し數年前有名な金石學者羅振玉氏が、この石佛の寫眞を見て六朝頃のものと云はれたと云ふ事を某氏より聞いてゐるが、果して然るかは研究の餘地があるまいかと思つてゐる。

若し本石佛が文殊菩薩とすれば、滿洲の文殊崇拜と關係を有し、尠くとも遼代頃まで溯り考へられはしまいかと思ふものである。

閻氏の邸宅

金州城内には昔を偲ぶ立派な大邸宅が多いの中でも閻家相氏の邸宅は其の代表的のものと云ふ事が出來る。閻氏は二百年來金州の名家として續いて來てゐる。現在の邸宅は數百年大改築をしてゐるとの事であるが、今から百年ばかり前、北平より工人を呼び寄せ建築したものであるから、北平の建築樣式を多分に存してゐる。今邸宅の樣式を述べれば大門の兩側にて東西の外側に對立して各群房のあり、大門を入ると第二門があり、その內側に門房、東西の廂房即ち大廳があり、裏の正面に本寫眞の如き正房がある。尙正房の東西に對立して各廂房があるが、今は區切つて又の家屋があるが、今は區切つてゐる十三間連脊の濱江省長閻傳紱氏の邸宅となつてゐる

（亞細亞大觀　十二輯二回）

乃木勝典氏戰死の

金州城の東北閻家樓會閻家樓屯七十二番地に在り。乃木大將の長男勝典少尉（二十六歲）が明治三十七年五月二十六日早朝歩兵第十五聯隊第一中隊の小隊長として、金州城東門を攻撃したる際、城壁上から發射した露兵の小銃彈のために腹部に致命的戰傷を受け、此の閻家樓第二野戰病院に收容せられ、同日歩兵中尉に昇級し、翌二十七日午後死亡された處の家屋である。後の丘上に寫眞は傷死された處の家屋である。尙金州城の東南に其記念碑が建立されてある。乃木中尉の碑があるが、其れは戰八里庄に乃

（亞細亞大觀　十二輯二回）

乃木勝典氏戰死の家

金州城の東北閻家樓會閻家樓屯七十二番地に在り。乃木大將の長男勝典少尉（二十六歳）が明治三十七年五月二十六日早朝歩兵第十五聯隊第十一中隊の小隊長として、金州城東門を攻撃したる際、城壁上から發射した露兵の銃彈のため腹部に致命的戰傷を受け、此の小銃彈家樓第二野戰病院に收容せられ、同日歩兵中尉に昇級し、翌二十七日午後死亡された。後の丘上に寫眞は傷死された處の家屋である。尚金州城の東南八里庄に乃木中尉の碑があるが、其れは戰死の場所でなく、一時屍体を葬りたる處である。

閻氏の邸宅

金州城内には昔を偲ぶ立派な大邸宅が多い其の中でも閻家相氏の邸宅は其の代表的のものと云ふ事が出來る。閻氏は二百年來金州の名家として續いて來てゐる。現在の邸宅は數百年ばかり前、北平より工人を呼び寄せ建築したものであるから、北平の建築樣式を多分に存してゐる。今邸宅の樣式を述べれば大門の兩側に門房、東西の外側に對立して各群房内の兩側に大門を入ると第二門があり、その内がある。尚正房の裏の正面に本宮眞の如き正房即ち大廳があり、又東西に對立して各廂房がある。

十三間連春の家屋があるが、今は區切つて分家の濱江省長閻傳紱氏の邸宅となつてゐる

金衙州門副都統門

金州城内東街に在り。現在金州警察署となり屋改造されてはゐるが、建物は殆ど當時のものである。金州に副都統衙門が設置されたのは清の道光二十三年(西紀一八四三)で渤海の海防を嚴にするため熊岳城の副都統衙門を移したものある。金州副都統は奉天に駐する盛京將軍の支配下にあり、蓋州(蓋平)以南の遼東半島の軍事及び　人に關する事項に就いて管掌してゐた。

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black